

# 提 言

「青少年の自己実現を支援するために」

～ 青少年の出番（参加・体験・つながり）を創ろう～

西宮市青少年問題協議会

平成21年（2009年）3月

# 提言「青少年の自己実現を支援するために」

## ～青少年の出番（参加・体験・つながり）を創ろう～

### 目 次

はじめに	1 P
居場所の創造や企画・立案に参加できる機会の充実	1 P
1．青少年が活動を始めるためのきっかけとなる場の創設	1 P
2．居場所創造のための青少年の意見の反映	2 P
3．市民活動団体、民間企業、大学など社会的資源の活用	3 P
4．地域全体で取り組むイベント	3 P
5．青少年活動コーディネーターの養成	4 P
自然、スポーツ、文化活動に親しむ機会の充実	5 P
1．自然環境の改善や自然に親しむイベントの開催	5 P
2．スポーツクラブ21を通じた小・中学校の連携と異年齢交流	6 P
3．さまざまな活動での子どもたちの意見の反映	6 P
4．子どもが体を使って自由に遊べる場所の確保	6 P
5．文化活動に親しむ機会の拡充	7 P
6．「トライやる・ウィーク」でのつながりや地域の人材の活用	7 P
青少年の就業や社会参加への機会の充実	8 P
1．大人の働く姿を見る機会や本物に触れる機会の提供	8 P
2．民間企業との連携による企業見学会や職業人セミナーの開催	9 P
3．NPO法人との連携による若者サポートステーションとしての機能	9 P
4．ボランティア活動の機会の充実	9 P
5．コミュニケーションツールを利用した活動支援	10 P
6．引きこもりの青少年に対する支援	10 P
課題の解決に向けて	11 P
1．家庭で	11 P
2．地域で	11 P
3．学校で	13 P
4．行政で	14 P
あとがき	14 P

## はじめに

当協議会では、平成19年5月9日に、意見書「青少年の自己実現のために ～自立につながる参加体験型の活動機会を拡充する～」を市長に提出した。この中で、社会環境、地域環境、学校環境、家庭環境など、青少年を取り巻く環境が変化してきており、そのために、社会参加に対して不安を持つ青少年、自分に自信が持てない青少年、夢や希望が持てない青少年が存在することから、青少年が自分の存在感を認識し、誇りと自信を持ってたくましく育ち、自立していくための取り組みを進めていくことが不可欠であるとして、必要な取り組みについて提唱した。

このたび、この意見書を元に、その内容を具現化するため、2年間にわたって検討した結果、具体的な取り組みとして次のとおり提言する。

### 居場所の創造や企画・立案に参加できる機会の充実

先の意見書では、青少年は、エネルギーを十分に発揮できる場や機会を求めており、青少年自らが進んで参加・体験できる仕組みを整えることが大切であるとの観点から、青少年の居場所の創造と青少年が企画・立案に参加できる機会の充実を提唱した。それを具現化するため、次のとおり提言する。

#### 1. 青少年が活動を始めるためのきっかけとなる場の創設

他市では、「青少年センター」などの青少年の活動拠点となるような施設において、若者達が各種イベントを自主的に運営し、その活動を行政が応援していくような取り組みが見られる。このような取り組みは、「何か一生懸命になれることを見つけたいが、どこに行っても何をすればいいかわからない」という若者にとって、その活動のきっかけとなるものである。

また、物を大切にしたり人を思いやる気持ち、自己表現ができて相手のことを理解できるコミュニケーション力など、いわゆる「生きる力」を身につけるために非常に重要な時期である小・中学生にとって、友達や異年齢・異世代の人との交流やさまざまな体験ができ、心の居場所となるような場が必要である。

## 具体的な取り組み

- \* 青少年の活動拠点としては、「ぷらっとアイ」や「大学交流センター」があるが、このような青少年の活動拠点となるような施設において、他市の例なども参考にしながら、若者達が各種イベントを自主的に運営し、その活動を行政が応援していくような取り組みやシステムを創設する。さらに、これらの施設が連携して一つのイベントを企画したり、片方の施設のイベントにもう一方の施設で活動する若者が参画したりするなど、「大学交流センター」で活動していた学生が、大学卒業後は「ぷらっとアイ」で自然に活動を続けられるような仕組みをつくり、互いの連携を進めるよう希望する。
- \* 児童館は、幼児から中学生までの子どもたちが自由に来館して楽しく遊べる施設として設置されており、山口地区に市内で9箇所目の児童館が4月に開館する予定である。こういった居場所となる施設は、子どもたちの身近にあることが大切であり、現在4箇所で実施されている移動児童館を含めて、更なる拡充が望まれる。
- \* 児童館における中学生の利用は、児童館によっては多いところもあるが、概ね10%以下となっている。また、高校生を対象とした施設が市内にはない。児童館や公民館など既存の施設において、中学生や高校生にまで対象を広げて異年齢交流を図るようなソフト事業を実施するなど、青少年の居場所となるような取り組みが必要である。

## 2. 居場所創造のための青少年の意見の反映

青少年の居場所の創造については、予算や人員の問題があり、行政でできることには限界がある。そのため、行政だけに任せるのではなく、地域においても取り組む必要がある。地域で居場所を創設するには、子どもたちの希望を取り入れるなど、青少年の意見を反映させることが重要である。

## 具体的な取り組み

- \* 地域での居場所の創設にあたっては、大人だけで考えるのではなく、子ども会や小・中・高等学校の生徒会組織の代表者を集めて、みんなの気持ちや考え方を

聞き、その意見を反映させる。その際には、能動性や自主性を引き出すような援助の仕方を大人が考えることが大切であり、大人が全て整えて子どもたちは言われたとおりにするだけといったことにならないような配慮が必要である。

- \* 子どもたちのことは、日常的に子どもたちと接している専門家から意見を聴くことも有効である。子どもたちの教育の現場にいる学校長や担当教諭を集めて、地域での居場所の創造について、一緒に協議することも必要である。

### 3. 市民活動団体、民間企業、大学など社会的資源の活用

青少年の居場所を創造するにあたっては、行政や地域以外に、さまざまな知識や経験を有する人のノウハウを活用することが大切である。西宮市には、市民活動団体、民間企業、大学など、社会や地域への貢献の一環として、青少年の健全育成に取り組んでいる組織が多くある。これらの社会的資源を活用すれば、今までは目を向けられてこなかった人たちへの新しい取り組みもできるものとする。

#### 具体的な取り組み

- \* 地域団体の活動は、地域の学校に通う子どもを対象としていることが多いが、遠くの私立学校に通う子どもなど、地域活動から漏れる子どもたちもおり、そういった子どもたちへの取り組みとして、市民活動団体、民間企業、大学など社会的資源を活用し、市全体として地域にとらわれない取り組みを進めることも必要である。
- \* 青少年の居場所の創造においては、青少年にさまざまな体験活動の機会を数多く与えることが大切であるが、地域の団体が市民活動団体、民間企業、大学などと連携し、それらが持っているノウハウを活用することが有効であり、その取り組みを支援するため、行政がそれらのノウハウについて調査し、情報提供に努める必要がある。

### 4. 地域全体で取り組むイベント

西宮市内では、誰でも参加でき、役割がそれぞれ分担されている、盆踊りや三代交流餅つき大会などのイベントが、各地域で行なわれている。このような取り組みは、地域コミュニティの活性化につながるものであり、青少年がさまざまな人と

交流するためにも、大変有効な手段である。毎年行なわれているこのようなイベントを通じて、青少年を地域の担い手に育てていくことが大切である。

#### 具体的な取り組み

- \* 地域全体で取り組むイベントに青少年をただ参加させるだけではなく、内容を計画する段階から参加させたり、準備や片付けなど地域の人と共に汗をかく機会をつくったりするなど、イベントの担い手として育てる。そういったことを通じて地域への愛着心を育み、青少年が地域の担い手として育っていくよう、地域で協力して取り組むことが大切である。
- \* 地域で行なわれているイベントは、一時的なもので終わりがちであるが、イベントをきっかけとして、地域の大人と青少年が日常的にもつながりを持つことが大切である。人と人がつながるきっかけをつくるためにイベントを開催するという視点に立って、イベントに参加した青少年にできるだけ声掛けをして顔見知りになり、その後の日常的な場で会った時にも、あいさつや声掛けをするなどの取り組みが、日常的なつながりを創るためには有効である。

#### 5. 青少年活動コーディネーターの養成

青少年は、様々なイベントを企画する場合、若い情熱と柔軟な発想力で、素晴らしい内容の企画を立案することがあるが、企画内容を具体化していく手立てや経験が乏しい。そのため、企画の段階では良い案が出ていても実施する段階でさまざまな壁に当たって挫折したり、実現性が乏しい内容の企画になったりすることがある。青少年の企画を実施する際に、彼らの活動を支援できる人材が必要である。

#### 具体的な取り組み

- \* 「大学交流センター」では、イベントプロデューサー講座を開催し、イベントを企画、コーディネートできる人材の養成をしているが、大学生が対象である。このような取り組みを「ぷらっとアイ」などの他の青少年の活動拠点や、公民館活動、宮水学園などで、もっと年齢の高い世代に向けても広げていく必要がある。
- \* 青少年の活動拠点や地域において、青少年の企画を実施する際のコーディネーターとして、市民活動団体、民間企業、大学などから経験豊富な人材を招き、そ

の活動を支援することも有効である。

## 自然、スポーツ、文化活動に親しむ機会の充実

先の意見書では、テレビゲームやインターネットの普及によって家の中で遊ぶ機会が増え、自然から様々な事柄を学ぶことが減少していること、また、スポーツや文化活動を行なうことによって大きな目標を持ち、達成感・満足感を得ることができることなどから、自然、スポーツ、文化活動に親しむ機会の充実を提唱した。それを具現化するため、次のとおり提言する。

### 1. 自然環境の改善や自然に親しむイベントの開催

西宮市は、海、山、河川といった豊かな自然が身近にある。これら海、山、河川の自然を保護し、自然環境を改善すると共に、十分に活用することによって、青少年が自然とふれあい、自然から様々な事柄を学ぶことができる。また、青少年自身が花を育てるなど、日常から自然に触れることも重要である。

#### 具体的な取り組み

- \* 河川の整備、改修にあたっては、安全性を重視しながら、水際植生や深みの保全、回復など、生物の生息環境に配慮した河川改修や水質の改善に努め、子どもが自然に親しめるような環境の整備、改善を図る必要がある。
- \* 青少年にとって自然が身近なものとなるよう、海や山の自然を生かしたイベントを開催する。その際、ただ楽しいだけでなく、自然を大切に作る心を育てられる内容で実施することが大切である。また、自分たちの趣味で海や山の自然の中で活動している団体があり、青少年が自然を体験できるように、これらの団体を育成することも有効な手段である。
- \* 地域団体と協力して、学校や公共施設の花壇を利用して花を植えるようなイベントを開催する。また、テーマを決めて各家庭で育てた花を持ち寄って地域で展示会を開催する。このような活動を積み重ねることによって、青少年が日常から自然に親しむ機会を増やすことが大切である。

## 2. スポーツクラブ21を通じた小・中学校の連携と異年齢交流

各地域において、スポーツクラブ21が活発に活動しており、さまざまな種目のスポーツに親しむことができる。しかし、スポーツクラブ21に参加している青少年は、ほとんどが小学生であり、中学生になると学校のクラブ活動があるため、スポーツクラブ21から離れてしまう。一部の中学校では、スポーツクラブ21と連携し、異年齢交流を図っているところがあり、このような取り組みが広がっていくことが望まれる。

### 具体的な取り組み

- \* 中学校のクラブ活動にスポーツクラブ21の子どもたちを招き、一緒に練習したり中学生が小学生に教えたりすることで、小・中学校の連携と異年齢の交流を図ることができる。

## 3. さまざまな活動での子どもたちの意見の反映

地域において、これまでさまざまな活動が行なわれてきたが、これまでの活動は、昔から受け継がれたやり方で、大人の側がしつらえたものが多かった。伝統や文化など、継承すべきものは残していく必要があるが、新たな活動を始める際には、子どもたちの意見も取り入れていくことも必要である。

### 具体的な取り組み

- \* スポーツクラブ21で新たな部をつくる時や、青少年愛護協議会や子ども会などで新たな活動を考える際、事前に子どもたちから意見を聴く機会を設ける。

## 4. 子どもが体を使って自由に遊べる場所の確保

野球やサッカーなどをする場合、運動公園など有料の施設はあるが、子どもは利用しにくい。一方、身近にある公園ではボール遊びができないため、子どもがボール遊びをする場所がない。子どもが体を使って自由に遊べる場所を確保する必要がある。

### 具体的な取り組み

- \* 既存の公園を、地域ごとに1箇所ずつ、ネットを張るなどしてボール遊び用の

公園に改修する。そのことによって、子どもたちが身近なところで気軽にボール遊びができるようになる。

- \* 子どもたちがいつでも自由に利用できるよう、平日の放課後に校庭を開放している小学校があるが、このような取り組みを全校に広げることも有効である。

## 5 . 文化活動に親しむ機会の拡充

文化活動については、日常的な活動の場、成果を発表・表現する場、本物を鑑賞する機会が大切である。日常的な活動の場については、学校のクラブ活動が中心になるが、それ以外にも公民館において「宮水ジュニア」事業などのソフト事業や「ぷらっとアイ」の音楽室の整備などの取り組みが進められている。成果を発表・表現する場についても、市民祭りや地域の夏祭り、子ども会のサークル発表会など、機会が設けられている。一方、本物を鑑賞する機会については、「音楽と出会うまち西宮」事業などの取り組みはあるが、子どもたちの参加が少ない。子どもたちが本物に触れる機会の充実が望まれる。

### 具体的な取り組み

- \* 文化事業の担当課と教育委員会とが連携することにより、学校単位・学年単位で本物に触れる機会を設けるなど、機会の拡充に努める必要がある。

## 6 . 「トライやる・ウィーク」でのつながりや地域の人材の活用

「トライやる・ウィーク」では、就業体験以外に、茶道、華道、着付け、郷土芸能など、さまざまな文化活動にも取り組んでいる。これらの活動を、「トライやる・ウィーク」だけで終わらせるのではなく、「トライやる・ウィーク」をきっかけとして、日常的な活動に結び付けられるような取り組みが必要である。

### 具体的な取り組み

- \* 地域の人材に協力してもらい、クラブ活動やサークル活動において定期的に指導に来てもらったり、地域団体のイベントなどの臨時講師に招いたりするなど、「トライやる・ウィーク」での人と人とのつながりを、活性化して市内に広げていくことが大切である。

- \* 西宮コミュニティ協会が作成している冊子「コミュニティ人材名簿」については、十分に活用されていない。もっと有効に活用するため、冊子を自由に見られる場所についての広報や、登録の呼びかけを積極的に行ない、登録者の活用を広げていく必要がある。

## 青少年の就業や社会参加への機会の充実

先の意見書では、青少年の社会的自立のためには、就業が非常に大事な要素であることから、勤労観や職業観を身につけることの大切さと、将来の夢や目標を持つことの大切さに言及し、青少年の就業支援の必要性について提唱した。また、若者の社会参加を図るためには、自分が社会を作っていく一人だという実感を持てるようにすることが必要である。それを具現化するため、次のとおり提言する。

### 1. 大人の働く姿を見る機会や本物に触れる機会の提供

地域コミュニティの希薄化が進む中、子どもたちが地域の大人と接する機会が減少し、将来の夢や人生の目標となる大人像が描きにくくなっている。子どもたちに仕事への関心を引き起こし、自分の将来像を描くきっかけを作る必要がある。

#### 具体的な取り組み

- \* 「トライやる・ウィーク」によって、職業体験の学習が行なわれているが、それだけではなく、子どもの頃から勤労観や職業観を身につけられるよう、学校や青少年育成団体の活動で工場見学に出かけるなど、大人たちの働く姿を身近に見る機会を増やすことが大切である。
- \* 子どもたちが将来の夢を持つことができるよう、学校の学習活動や地域のイベントに芸術家や技能者を招き、子どもたちが本物に触れる機会を提供することが大切である。

### 2. 民間企業との連携による企業見学会や職業人セミナーの開催

大学生や高校生が、企業の知名度にとらわれて、その企業が実際どのようなこと

をしている会社であるかが分からないまま就職活動をしているケースがある。その結果、せっかく就職しても、実際に職に就いて「こんな筈ではなかった」と感じ、離職する若者も多い。企業の知名度よりも、実際の仕事の中身を知った上で、自分にとってやりがいのある仕事に就けるよう、若者が企業の仕事の中身を知る機会を増やすことが大切である。

#### 具体的な取り組み

- \* 大企業などでは、インターンシップが盛んに行なわれるようになってきたが、大企業だけではなく、中小企業や零細企業にも呼びかけて、企業見学会や職業人セミナーを催すなど、企業やそこで働く人を学生が見られる機会をつくる。

### 3. NPO法人との連携による若者サポートステーションとしての機能

各地にある若者サポートステーションでは、ニートやフリーターの就業支援のために、NPO法人などが、個別相談、情報提供、スキルアップ講座、職業体験などの活動をしている。これらの例を参考に、若者の就業を支援していく取り組みを進める必要がある。

#### 具体的な取り組み

- \* 「ぷらっとアイ」などの施設を使い、若者サポートステーションのように、行政が主体になるのではなくNPO法人や民間の力を使いながら、行政が黒子として支える側に回るといった場を創設する。その際、NPO法人や民間企業、大学などに、広く参加を呼びかけることも必要である。

### 4. ボランティア活動の機会の充実

今の若者にとっては、社会というのは自分とは非常に遠い存在で、社会参加と言われた場合、既に出来上がっている社会にどのようにうまく適応し参加していくかということしか考えておらず、自分が発展させたり変えたりする対象としては見ていない。若者の社会参加を図るためには、自分が社会を作っていく一人だという実感を持てるようにすることが必要であり、そのためには、様々なボランティア活動や体験を通じて、実際に社会にかかわる機会を増やすことが大切である。

#### 具体的な取り組み

- \* きっかけの一つとして、「トライやる・ウィーク」において福祉施設や地域での活動に取り組んだ子どもたちと「トライやる・ウィーク」以後もつながりを持ち、日常的に活動を続けていくように呼びかけるなどの取り組みが必要である。

### 5. コミュニケーションツールを利用した活動支援

近年、ボランティアをしたいと思っている若者が増えており、ボランティアの情報に対するニーズは高い。大学交流センターなど、パソコン用のホームページでのボランティア募集情報を得られるサイトはあるが、募集の情報と利用する若者のニーズとが、なかなか合致しないという課題がある。これは、情報と人とを結び付けようとしていることが要因として考えられる。

#### 具体的な取り組み

- \* コミュニケーションツールを使った活動においては、情報と人とを結ぶのではなく、コミュニケーションツールを使って人と人とを結び、その中で情報が広がるという取り組みが必要である。その際、携帯電話など、より若者に近い手段で、人と人とのつながりを広げていくことが大切である。

### 6. 引きこもりの青少年に対する支援

引きこもりの問題は、社会的な問題になってきたが、今後もっと大きな問題になることが予想される。しかし、まだ市町村レベルで対応を考えるところまではいっていない。就労という高い目標にはすぐにはいけないが、段階を踏んで少しずつ社会参加できるような支援が必要である。

#### 具体的な取り組み

- \* 引きこもりの人が社会参加を果たすためには、家族以外の人とかかわりを持つようにならなければならないが、そのための第一歩として、家庭以外で、本人にとって安全で安心な居場所をつくるといった場を創造する必要がある。
- \* 「今は立ち直って社会参加を果たせているが、以前は自分自身も引きこもりであった」という人がサポートする側になって、引きこもりの人の相談相手になるな

ど、過去の経験者を活用した支援の体制を構築することも有効である。

## 課題の解決に向けて

先の意見書では、社会環境、地域環境、学校環境、家庭環境が変化しており、これら青少年を取り巻く環境の変化が、青少年にさまざまな影響を及ぼしていることについて触れた。これらの環境の変化は、解決すべきさまざまな課題をもたらしており、家庭、地域、学校、行政など、それぞれの場において問題となっている。これらの課題の解決に向けて、次のとおり提言する。

### 1. 家庭で

青少年を健全に育成する第一義的な責任は家庭にある。しかしながら、子育てに悩む親も多く、そうした親の中には、親子だけの狭い世界に閉じこもって、誰にも相談できずにいる場合もある。こうした親や家庭への支援を拡充する必要がある。

#### 具体的な取り組み

- \* 一人で悩むのではなく、市が作成しているガイドブック「にしのみや子育てガイド」を活用し、自らすすんで行政の子育て支援の部署などの専門家に相談したり、地域の子育てサークルで同じ悩みを持つ人と交流したりすることによって、心の負担を軽くすることが大切である。
- \* 行政で取り組んでいる子育て支援に参加が難しい人に対しては、地域で子育て経験のある人が相談に乗るなど、周囲の人がサポートしてつながりを持つよう心がけることも必要である。

### 2. 地域で

青少年愛護協議会やスポーツクラブ21など、地域のさまざまな団体では、なかなか次の世代が育たず、後継者の育成に困っている。そういう団体では、リー

ダーが一人でたくさんの仕事を抱えていることが多い。しかし、リーダーが一人で頑張るほど後継者は育たないものであり、人に任せるよう心がける必要がある。

#### 具体的な取り組み

- \* リーダーの仕事を少しずつ他の人に振り分け、リーダーはそのサポートに回り、「あなたがいないと、この事業は成り立たない」といった、その人にスポットライトが当たるような場面を増やしていくことが、世代の交代や後継者をつくるときに非常に大切である。

青少年育成に取り組む地域団体の中には、協力者が増えずに困っているところも多い。長年、組織で頑張っている人は、経験も蓄積も豊富であるが、新たに参加した人は経験もなく、ギャップは相当大きい。そのため、新たに参加してくれた人に対しては、役割や仕事の分担について配慮が必要であるが、過度の配慮や遠慮は、却ってその人を遠ざける結果となることが多い。

#### 具体的な取り組み

- \* 協力を依頼して新たに参加してくれた人に対しては、何も分からないからと、お客さん扱いするケースがある。しかし、せっかく無理をして協力しに来てくれた人に、何も役割がなくては、次回から協力してもらうことは難しい。新たに参加してくれた人には、必ず役割や出番をつくり、評価していくという関わり方が、協力者を増やしていくためには大切である。

講演会などを企画しても参加しない、参加できない人が多くいる。そういった人たちが参加できるようにするためには、その人たちが参加しやすい環境を整えることが大切である。そういう人たちが参加している行事やイベントを利用することも一つの手立てである。

#### 具体的な取り組み

- \* あまり参加しない、参加できない人たちが参加できるようにするためには、地域団体と学校とが連携し、日曜参観や文化祭などの学校行事の日に、行事終了後、学校を借りて開催するといった工夫が必要である。

行事などの広報については、地域の中に情報が届かない、届きにくい人が存在しており、これらの人への広報の仕方について、新たな工夫が必要である。これら情報が届かない、届きにくい人への広報については、今までの広報のあり方を見直し、どういった人に届いていないのか、届けたいのかを検証し、その人にとってより身近な広報媒体や手段を使うことが大切である。

#### 具体的な取り組み

- \* まず、地域の中に、情報が届かない、届きにくい人がいないかを、より多くの人によって検証する必要がある。そのような人がいる場合、近所に住む人や、親しい人を通じて呼びかけをするなど、その人に届く方法でアプローチすることが大切である。

### 3. 学校で

近年、地域コミュニティが希薄化してきており、そのことによって、学校では地域住民とのトラブルが多くなってきている。これは、地域住民と子どもたちとのつながりが薄れてきていることが大きな要因である。地域住民と子どもたちをつなげるためには、学校の施設に地域の人たちが入って活動するといった取り組みを通じて互いの愛着心を育てることが重要である。大人と子どもが入って一緒にやるという中でつながりをつくり、そこで挨拶したり、地域の人と話をしたりできる、その中で青少年は地域で育てていこうという意識が出てくる。その際の呼びかけ方については、「手伝ってください」というような、相手に負担感を持たせることは控え、地域のさまざまな人の「こういう事がしたい」という気持ちに訴えかけるような方法が有効である。

#### 具体的な取り組み

- \* 広い庭で花いじりがしたいと思っているマンションに住む花好きの人たちに、地域団体を通じて呼びかけ、学校の庭木の世話をしてもらう。
- \* 昔遊びが得意で子どもたちに教えたいと思っている年配の人たちに、昔遊びを子どもたちに教えてもらうイベントを、地域団体と共に企画する。

- \* 一芸があり、誰かに見てもらいたいという人に、クラブやサークル活動、特別授業などの臨時講師になってもらう。
- \* このような取り組みを通じて地域住民の学校参加の機会を増やし、地域住民と子どもたちのつながりを深め、地域住民と学校とが身近な存在になることが大切である。

#### 4. 行政で

近年、価値観の多様化など様々な要因により、行政需要は年を追うごとに増大している。限られた予算や人員でこれらに対処するためには、行政が何もかもするのではなく、黒子になるような取り組みを増やしていく必要がある。

##### 具体的な取り組み

- \* 行政においては、地域団体との参画と協働による取り組みはある程度進んでいるが、今後は、市民活動団体、民間企業、大学など社会的資源を有効に活用していくことが大切である。これまで取り組んできた地域団体との参画と協働は勿論、市民活動団体、民間企業、大学との参画と協働についても、あらゆる分野で進めていくことが必要である。

#### あとがき

青少年の自己実現を具現化するためには、青少年自身が最初の一步を踏み出すことが肝要であるが、それには我々大人の支援が必要不可欠である。青少年の目線に立って、始めの一步を踏み出せるようなきっかけをつくり、青少年が自分を見つけるためのチャンスとして「やってみよう」と思えるよう、呼びかけていくことが大切である。家庭、地域、学校、行政が、それぞれの課題に取り組みながら、協力して青少年を支援していくことが求められている。